

第 31 期青少年問題協議会意見具申（案） 【概要】

「生きづらさを抱える若者の社会的自立に向けた支援について」

はじめに

第 1 章 生きづらさを感じている若者の現状

1 若者を取り巻く生活環境（本文 3 頁～ 5 頁）

- (1) 現在の若者の全体像
 - ・ 地域や家庭単位の支えの脆弱化（親と子供で構成されている世帯が増加）
 - ・ 急速なスマートフォンの普及（高校生 88.8%）
 - ・ 「自己肯定感」を有する若者は 5 割弱（諸外国は 8 割前後）
 - ・ 若者の生活圏の「内閉化」（実際の社会でもネット上の交流において自分の環境と似通ったところで閉じる傾向）
- (2) 社会的自立に困難を有する若者の現状
 - ・ 都内のひきこもり状態にある若者の人数は、推計約 2 万 5 千人
 - ・ 中途退学者は、都立高等学校と私立高等学校を合わせて、約 4 千人程度
 - ・ 刑法犯少年は減少しているが、再犯者率は 7 年連続 3 割強と高止まり

2 若者の支援に関する現在の主な取組（本文 6 頁～ 9 頁）

- (1) 若者全体への相談支援
 - ・ 若ナビαでは、若者の総合相談窓口として、電話、メール、来所により様々な分野の相談を受け付け
- (2) ひきこもり等の若者への支援
 - ・ サポートネットでは、ひきこもりの専門相談窓口として、電話、メール、訪問により相談を受け付け
- (3) 非行歴を有する若者への支援
 - ・ 若ナビαでは、非行専門の相談員を配置し、非行歴のある若者も相談可

第 2 章 社会的自立に困難を有する若者や家族が、状況に応じて必要な相談支援を受けることができない要因

1 支援を受けた方が望ましい状況にあるが、その必要性を認識していない段階

（本文 10 頁～ 11 頁）

- ・ 社会全体として、悩みを抱えている若者の自立支援の必要性について、他人事との思いが強く、理解が十分浸透していると言えない。
- ・ 若者や家族が課題を認識していても、自力で解決しなければならないと思っている場合もある。

- ・ 若者や家族に対して、若ナビαやサポートネットの広報を行っているが、認知度は高いと言えず、支援を受けるために必要な情報が十分に届いていない。

2 支援の必要性は認識しているが、相談先を見つけることができない段階

(本文12頁)

- ・ 若者や家族が抱えている課題が多岐にわたり、課題を整理できない場合は、最初にどの窓口で相談したらよいか判断できないケースは少なくない。
- ・ 学校や就業などの所属や関係が途切れ、どこに相談していいのかわからなくなる場合がある。
- ・ 悩みや課題を近隣の人に知られたくないという気持ちから、身近な地域では相談を躊躇するなど、相談機関を利用しづらいと感じる場合もある。

3 支援機関等に相談したが、適切な支援につながらない段階 (本文12頁～14頁)

- ・ 悩みを抱えている若者は、自分の言葉で相手に伝えることが苦手なことがある。家族も負い目を感じている場合など、相談窓口で十分に伝えきれないことがある。
- ・ 支援機関側も悩みの本質を聞き取ることができず、見立てが不十分になり、適切な支援機関等につなげないことがある。
- ・ 分野ごとの支援に留まり、複合的な課題に対応しきれず、支援の切れ目が生じている場合もある。

4 若者を社会全体で支える必要性 (本文14頁)

- ・ 社会全体において、積極的に若者に関わろうという意識は希薄
- ・ 多様な価値観や他世代との交流といった多彩性、多様性を実感し、体験できる機会は少なくなってしまうがち

第3章 若者が社会的に自立し活躍できる社会の実現に向けた仕組みづくり

1 未来のために都民の全てが若者をサポート (本文 15 頁～17 頁)

～若者支援を身近に感じられる情報発信～

(1) 社会全体で若者の生きづらさに寄り添う「サポーター意識」の浸透

- ・ 社会を構成する全ての主体が、サポーター意識を持ち、若者を支えていくことが必要
- ・ サポーター意識を持ち若者を見守ることは、社会全体の役割であるというメッセージを強力かつ継続的に発信が何よりも重要
- ・ 人に頼り頼られることは当たり前のことと捉えるメッセージ発信も重要

(2) 若者や家族の心に響く SNS 等を活用した情報発信

- ・ 若ナビαやサポートネットの認知度を高めることが必要

- ・ 若者や家族の行動パターンを踏まえた、SNS等を活用したより適切な手段での情報発信が重要
- ・ 情報発信の際は、若者や家族が相談を受けることのハードルを下げるような内容を発信することも必要

2 支援のハブ・ステーション「若ナビα」（本文 17 頁～20 頁）

～若者や家族が相談しやすい環境の整備～

(1) 誰でも、どんなときも、どんな悩みでもまずは頼れる支援の入口「若ナビα」

- ・ 若ナビαやサポートネットは、ハブ・ステーションとしての役割を果たせるよう機能強化が不可欠
- ・ 若者や家族だけでなく支援機関等にも活用されるような機能の発揮を期待

(2) 誰でもどこでも悩みの相談先をネットで探せる「ポータルサイト」の構築

- ・ 若者や家族が最適の支援機関等を容易に検索できる仕組みの構築が急務
- ・ 支援機関等がリファーマー先を検討する際に、詳細な情報を幅広く入手できることも重要

(3) 身近な地域で支援を受けられる環境づくり

- ・ 身近な区市町村での窓口整備が加速されるよう、都の支援策の更なる充実・工夫が必要
- ・ 各地域での社会参加応援事業実施団体による支援の充実や団体の増加につながる都の取組が必要

(4) 支援力を高める能力開発・研修

- ・ 若者や家族が抱えている課題を的確に把握するためには、支援者の支援力の向上が必須

3 どんな悩みも取りこぼさない「スクラム連携」（本文 20 頁～22 頁）

～若者や家族に寄り添った重層的な支援～

(1) 若者や家族の悩みや思いを橋渡しする「代弁者」機能

- ・ 抱えている悩みや思いをリファーマー先に橋渡しする代弁者機能が不可欠
- ・ 若ナビαやサポートネットで実績を積み、将来的には、各支援機関等における代弁者機能の仕組みの模索を期待

(2) スクラム連携の調整役「コーディネート」機能

- ・ 関係機関の役割分担や連携に関する総合調整を行うコーディネート機能が不可欠
- ・ 若ナビαやサポートネットで実績を積み、区市町村等に還元し、地域での若者自立支援に活用

(3) 若者や家族の多様な悩みを多様な支援機関が、得意分野を生かしてスクラム連携

- ・ 若者や家族のどのような悩みや課題も取りこぼさないようなスクラム連携が不可欠
- ・ 様々な機関が連携して支援する場合、リファーする際の漏れのない情報共有が必要

第4章 若者がいきいきと輝ける社会へ（本文 23 頁～24 頁）

～自分らしい生き方を実現できる環境づくり～

- ・ 自らが社会の構成員として重要であるという“自己有用感”を感じる事が重要
- ・ 様々なボランティア活動に日常的に関わる機会作りが重要
- ・ 少年非行をより一層効果的に防止するための施策のあり方の検討が必要

おわりに